
東方旧今伝

はる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方旧今伝

【コード】

N1940BA

【作者名】

はる

【あらすじ】

幻想郷の妖怪と、旧妖怪とが争う物語。

旧作キャラの紹介（前書き）

私なりの紹介文です。

旧作キャラの紹介

旧作キャラについて、簡単な紹介を書きました。

もちろん「東方旧今伝」での設定なので、名前以外はほぼオリジナルなのでご了承下さい。

旧作は、今のキャラ程原作の設定とかあんまり無いんですよね（
| ^ ; ）
ではキャラ紹介。

・シンギョク

元・魔界の門番。

シンギョクは男と女の姿に変わる事が出来て、性別によって戦い方が変わる。火、水、風、木、土、閻系の魔法が得意。
強さは4、5ボス程度。

・エリス

魔界の悪魔。

雷、閻属性魔法が得意で性格は無邪気だが、戦いの際は狡猾な面もちらほらと。サリエルを慕っている。
強さは4、5ボス程度。

余談であるが、

サリエル、コンガラ、キクリ、ユウゲンマは魔獄の大妖怪で恐れられている。

・ユウゲンマ

魔獄の大妖怪の一角。

5つの邪眼が特徴、戦い方は変わっている。普通に喋れます。強さは5、6ボス程度。

・キクリ

魔獄の大妖怪の一角。

ユウゲンマと同じく、変わった戦い方をする。手に持つ魔鏡が力の源。

強さは5、6ボス程度。

・コンガラ

魔獄の大妖怪の一角。旧妖怪の6柱の一人。

手に持つ「獄星剣」は地獄一の刀、並の相手なら興味が失せてしまう。ちよっとだけバトルマニア。旧妖怪の

強さは6ボス以上。

・サリエル

魔獄の大妖怪の一角。旧妖怪の6柱の一人。天界から追放され魔界へと落ちて、堕天使なる。魔界でも最強クラスの強さを誇る。様々な魔法を使う。

強さは6ボス以上。

・里香

種族は人間で、機械いじりが得意な少女。

機械系を駆使した戦い方をする、ただし自身は弱い、なのです！

強さは『一応』1ボス

・明羅

妖怪侍、名刀「月影」で戦い、過去に様々な相手の剣技を吸収してきている。

強さは3、4ボス程度

・魅魔

種族は悪霊、魔理沙の師匠であり、幽香の良き友人でもある。魔理沙と同じ魔法系統を得意とする。強さは6ボス以上。

・エレン

種族は魔法使い、ペットとソクラテスを飼っている、明るい少女。宝石を使った魔法を得意とする。強さは2、3ボス程度。

・朝倉理香子

科学者兼魔法使い。

あまり魔法は使いたくない性格。夢美とは犬猿の仲だが、意見が合う時は合う。

強さは4、5ボス程度。

・小兎姫

元・月の警察官、よく人が集めなさそうな物に興味がある変なコレクターでもある。姫と言われながら、運動神経はかなりいい。強さは3、4ボス程度。

・カナ アナベラル

過去の博霊神社の騒霊。

穏やかな性格で、争い事は苦手だが、ピンチの仲間を見捨てない。強さは不明。

・北白河ちゆり

夢美の助手、夢美には及ばないがかなりの才を持つ。基本苦勞人、パイプイスはどこからか出てくる。人間らしいトリック

キーな戦い方をする。

強さは4、5ボス程度。

・岡崎夢美

旧作の天才。人間でありながら並の妖怪では歯が立たない程の実力者。科学というメリットを駆使した戦いをする。

強さは6ボス程度。

・おれんじ

バトワリングが得意な、元気いっぱいの子。

先代の霊夢がトラウマ。動きのある戦い方で、相手を翻弄する。

強さは2、3ボス程度。

・くるみ

湖の悪魔。過去に幽香が夢幻館を湖を守るように言われ、水が苦手な悪魔に嫌がらせを図るが、くるみは全力で任に当たった優しい子。おかげで、悪魔なのに水魔法も使える。

強さは3、4ボス程度。

・エリー

元・夢幻館の門番。鎌を使った戦い方をする。戦いに中々のセンスを持つ。

強さは4、5ボス程度。

・夢月

元・夢幻館の悪魔の妹。

普段メイド服を着ているが、それは姉の趣味で着ているが、夢月自身、結構気に入っている。

強さは5、6ボス程度。

・幻月

旧妖怪の6柱の一人。旧妖怪でも最凶と畏怖されてる悪魔。妹の夢月には甘い。コンガラと同じ性で、弱者は眼中無し、強い者は大歓迎。

強さは6ボス以上。

・サラ

魔界のもう一人の元・門番。

戦いは常にフェアで望み、自分の拳に絶対の自信がある。

強さは、3、4ボス程度。

・ルイズ

魔界に住む旅行好きの妖怪。

戦いはあまり興味が無く、仕掛けられてもスルーする。しつこいと相手をおちよくりまわす。

強さは2、3ボス程度。

・ユキ

純炎系魔法使い。

性格も明るく活発であるが、若干アホであるが、戦いに関しては頭は回る。キれると6ボスに迫る強さを見せる。マイとは良きパートナー。

強さは、4〜6ボス程度。

・マイ

純氷系魔法使い。

普段は背中の羽を隠しており、本気を出すと生成される。以前はユキを心の中でうざいと思ってたが、今はそれ程思っていない。

強さは4、5ボス程度。夢子

神綺が創ったメイドであり、戦闘技術が非常に高い。ナイフや短剣を使用する。家事のスキルもかなりのもの。強さは5、6ボス程度。

・神綺

旧妖怪の6柱の一人。普段は穏やかな性格だが、魔界神としての強さは計りしれないものを秘めている。サリエル、魅魔とは親友の仲娘のアリスにかなり甘い。強さは6ボス程度。

以上、長々と書きました。

強さが1ボスなの里香しかいませんが、それは旧作キャラに「程度の能力」が無い事ので、個々の妖力や魔力を高い設定にしました。

一応ですが、シンギョク（男）以外は全員女です。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました（一一）

東方旧今伝 第1話

地獄

昔は旧都が地獄だったが、今は鬼や地底妖怪がわいわいと騒ぎ憩いの場所となっている。

その旧都の奥にある地霊殿

そしてさらに奥へと進んだ先に、現地獄が存在する。

「…こう書いて…こうして…ふう、完成だ」

誰かの声がする。こんな薄暗く、魔界と同様危険な場所であるのに一体誰が。

「これで、ここはおさらばだな。ま、悪く無かったがな」

彼女の名前は魅魔。

幻想郷の地獄の管理人。悪霊であるが、先代の博霊が生きていた頃は、博霊の神という存在だったが、今は完全に放置、疫病神とも捉えられるかもしれない。

「一日かがりで『陣』を書くとはな。ま、成功して理論通り事が進めば、まさに禁術ものだがね」

わざわざ地面にこんな巨大な陣を手間隙掛けて書くとは、まるで魔法歴何年の頃だったか。魅魔は思わず苦笑してしまう。

ちなみにこの魔法陣は、地獄や魔界の化け物共の生き血で書いたもの。

チヨークなどで書いたものとは訳が違う。

「魅魔ちゃん」

「お久しぶりです」

「へへ、これまた凄い陣だな」

「うわっ、これ血で書かれていますよね」

後ろから私を呼ぶ声が出て、振り返ってみると、

魔界の神『神綺』

その従者『夢子』

5世紀先を行く天才『岡崎夢美』

その助手の『北白河ちゆり』

の4人がこちらに歩いてくる。

「お前さん方、タイミングが良すぎるね」

「多分、そろそろ始めるんじゃないかって思ったからな」

「こいつの事まで、夢美の頭には入ってるのかい」

こいつの頭脳はホントに驚かされると、魅魔は感心を通り越して呆れていた。

「それにしても、魅魔様がおっしゃられた事、本当なのですか？」

「そうだな、夢子。ただ100%成功するとは限らん」

「ふふ、そんな事言っても、大抵魅魔ちゃんは成功させちゃうんだもんね」

「神綺……何気にプレッシャーだぞ、後ちゃんは止める」

相変わらずばやばやした奴だ。神としての威厳が全くないが、神綺らしいか。

久しぶりの再開に、他愛のない会話で花を咲かせる。

「さて、おしゃべりはこの辺にしよう」

「歴史的瞬間ですね、教授」

「ああ、その後のプランはここに入っている」

夢美は右手の人差し指で頭を、トントンとする。そんな未来の事も

あの小さな頭に入ってるとは、しかも大抵外さないし。

「さあ…始めるとするか」

魅魔は、手を地に置くと、魔法陣が黒光りに輝き始める。

本来、魅魔は魔、星、光、熱系の魔法が得意なのだが、この黒くて深い闇は、完全に闇、暗、夜などの力を使っている。

ただ、こんな星の輝きすら見れない地獄で、魅魔の魔法は最大限に発揮される訳がない。

今使っているこれは、魔の道なら絶対に使えない、否、使ってはいけない禁術。

「…リヴァイバル……ソウル！」

その言葉を紡いだ瞬間、魔法陣から黒くて中心が見えない深い闇が辺りを包む。

「…あれ、反応ありませんね？」

「ちゆり、まだ学業が足らんかったか？」

「もうあんな退屈な講義はお断りです…」

ちよつと急かしちゃったかと、ちゆりは心の中で少し反省をする。

「…神綺様」

「ええ、感じるわ。そう……懐かしい、とでも言うのかしらね」

「ふう〜、成功だ」

魅魔は疲れた〜つと言いながら立ち上がると、陣の闇が徐々に薄く
なつていく光景を見つめる。

「これは…」

魔界の門番、『シンギョク』

「……フツカツ」

災いの目、『ユウゲンマ』

「ここつて地獄？」

無邪気な悪魔、『エリス』

「こんな事するのは…」

地獄の月、『キクリ』

「多分、目の前の方の誰かじゃないかしら」

死の天使、『サリエル』

「二度目の…生か」

星の騎士、『コンガラ』

「何か暗い所なのです」

小さな戦車娘、『里香』

「地獄か、よくここで修業したものだ」

清き侍、『明羅』

「ソクラテス、また一緒に遊べるね」

「…ニヤ〜ン」

空白少女、『エレン』とペットのソクラテス

「またいろいろ集められるわ!」

弾幕に美を夢見る姫、『小兎姫』

「小兎姫ちゃん、相変わらずテンション高いね…」

夢の騒霊、『カナ・アナベラル』

「夢美がまた何かしたのかしらね」

旧作のもう一人の天才、『朝倉理香子』

「あれ、あたし靈夢に倒されたはず……」

彩色バトン娘、『おれんじ』

「幽香：どこにいるのかな？」

湖の悪魔、『くるみ』

「幽香は、今の幻想郷にいるわよ、くるみ」

境目の門番、『エリー』

「姉さんは何かしたい？」

「とりあえずひと暴れしたいわね」

夢幻姉妹『夢月』と『幻月』

「あつ、門番守らなきゃ」

魔界のもう一人の門番、『サラ』

「サラ：生き返って真、自分の役割を徹するのね」

魔界の放浪者、『ルイズ』

「凄い、みんな揃ってるよ、マイ！」

「冷静に考えて、今凄い事が起きたんだけど……」

魔界の氷炎コンビ、『ユキ』と『マイ』

先代の靈夢が退治した妖怪が、今まさに蘇ったのだ。

「す、凄い……」

「はは、すげえもの見ちまったな……」

この事に、夢子とちゆりは目の前の妖怪達を呆然と見つめていた。
こんなにも妖気が漂う、並の妖怪なら本能で逃げ出しそうな光景だ。

「これで、カードは揃った」

魅魔は、背中の6枚の黒き翼を広げる。

「お前達、今の幻想郷を……支配する」

東方旧今伝 第2話（前書き）

原作キャラが登場です。

東方旧今伝 第2話

〔博霊神社〕

霊夢「…ハア、お茶を飲んでいる時が最高至福って感じだわ」
のんびりとお茶を飲んでいる彼女は、博麗霊夢。

最近妖精達が騒いでいたらしいけど、どうせまたチルノ辺りがはしゃいでただけでしょうと、霊夢は特に目を向けていない。

霊夢「以外と魔理沙はノリノリに関わってたみたいだけど」

最近の妖精は面白いつて魔理沙は言ってたけど、結局妖精のいたずらに付き合わされただけじゃない。

霊夢「さて、境内の掃除をするか」

霊夢は立ち上がり、土間へ向かおうとすると、

魔理沙「霊夢！」

突然目の前の障子が勢いよく開かれ、魔理沙の姿が目映る。

霊夢「何よ、そんなに慌てて」

今の魔理沙は明らかに焦っているという感じがひしひしと伝わる。
霊夢がだるそうに質問をすると、考えていた答えが返される。

魔理沙「何呑気に茶なんて飲んでるんだよ。異変だよ、異変！」

異変

幻想郷の妖怪やらが暇潰しで起こす、ちょっと度が過ぎるお遊び。

霊夢「異変でそこまで焦る必要ないじゃない」

魔理沙「今までとは訳が違うらしいんだ。紫が言っているんだ」

へえ、まるで永夜異変や地霊異変を思いだすわね、と霊夢は軽く感慨に浸る。

「少し面倒だつて言いたいの？」

「とにかく外に出る。萃香が『みんな』を集めている」

「わかったわよ」

異変にそこまで焦るのも魔理沙らしくないわねと思いつつながら、
は外靴に履替える。 霊夢

魔理沙「紫、引っ張り出してきたぞ」

紫「ありがとう、魔理沙」

霊夢「……何、この百鬼夜行状態……」

博霊神社の境内に、紅魔異変から宝船異変、その他もろもろ関わった妖怪が勢揃いしている。

紫「これを見たら解ると思うけど、それ程今回の『異変』はやばいの」

霊夢「紫らしくないわね、そんな弱気なんて」

いつもは私をおちゃらけ回したりする紫だが、こんなふうになるのは、何か相当面倒な事が起こる前触れの状態ね、と霊夢は肩を落とす。

紫「こんなふうになるのも仕方ないわよ。実は……」

魔理沙「紫、あいつらは……」

魔理沙が私達の会話を断ち切り、紫に質問をぶつける。

「四季映姫と、小町は無事なのか!?!?」

〈裁判所〉

死んだ魂が、死神に三途の川で送られる場所。

普段はここで魂を天国や地獄に送る判決やらを下すのだが、

コンガラ「たつた二人で」

サリエル「よくここまで耐えたわね」

大勢の妖怪が目の前にいる。四季映姫と小町はボロボロな姿になりながらも、旧妖怪の猛攻に踏ん張っていた。

映姫「ハア、ハア、小町、他の裁判員や死神達は…」

小町「ハア、大丈夫ですよ…今行った奴で最後ですよ…」

映姫はその言葉を聞くと、僅かに安堵の表情を見せる。

何故他の死神に攻撃しないかは気になるが、それならそれで助かるというやつだ。

マイ「よそ見して大丈夫？」

氷塊「コールドブロック・リボルバーシユート」

マイの目の前に氷の塊が幾つかが生成され、二人に目掛けて放たれる。

小町「ッ、ハアッ！」

死符「死者選別の鎌」

小町が振り上げた鎌を振り落ろすと、強い妖気が氷弾を掻き消していく。

小町「ぐっう…」

映姫「小町!？」

妖力を使い過ぎたせいか、小町は地面に膝をついてしまう。

ちゆり「こいつら凄いですね」

夢美「まあ閻魔にその直属の部下の死神だ。実力はかなりのものだ」

だが運が悪かったな。

2対25

戦いに卑怯も何も無い。

小町「……四季様、あたいが今から能力を使います、その間に…」

映姫「馬鹿な事は考えないで下さい…部下を見捨てて逃げるなど…上司として失格ですよ」

ああ、予想通りのですかいと、小町は半ば呆れる。ま、四季様らしいか。

キクリ「まだ抵抗するみたいね」

エリス「もうあたしで潰しちゃおっかな」

魅魔「やり過ぎるなよ、エリス」

エリス「わかってるわよ」

エリスがカードを手に生成し、それを唱えようとする刹那

竜巻「天孫降臨の道しるべ」

エリスの目の前にに巨大な竜巻が発生する。

エリス「な、なによこれ!？」

あまりの風の強さに目が開けられない。

文「よかった、二人とも無事でしたか」

はたて「なによ、この妖怪共は」

二人が映姫と小町の目の前に降り立つ。

小町「文とはたてか。助かったよ」

文「二人とも、今の内に」

はたて「あんたらよくこいつらの相手してたわね」

文が小町を、はたてが映姫を背中で担ぎ、その場から飛び立つ。

コンガラ「竜巻など、目障りだ」

コンガラは腰に掛けてる鞘から獄星剣を抜く。そして、

コンガラ「……一閃」

一振り、上からたったの一振りで、文の竜巻を掻き消したのだ。

文「私の竜巻が!?!」

はたて「振り向いたら追いつかれちゃうわよ!」

竜巻は消されたが、距離はもう十分に取った。

サラ「どうする、魅魔?」

魅魔「止めておけ。まだスタートラインにすら立っていないんだ。焦らなくてもいい」

神綺「とりあえず、最初の目的は達成ね」

魅魔「ああ、この裁判所を、我らの拠点とする」

幻想郷で唯一の裁判所、建物自体はかなり大きい。

博霊神社からそこそこ離れているから、直ぐに攻められる事はないだろう。

魅魔「さて、夢美、そろそろアレをするから、準備をよろしく頼むよ」

夢美「了解した」

（博霊神社）

霊夢「…今の話し、本当なの？」

紫「ええ、何故か朝起きてからスキマは使えないし、何より朝一に複数の妖気が裁判所に集まったの」

こういう時こそ私が確かめたりするのに、能力が使えなくなっただけでこうもダメになるなんてと、紫は肩を落とす。

萃香「紫、らしくない事するなよ。私だって能力なきやこうやって

みんなを萃められないよ」

現時点で、萃める妖怪はほぼ博霊神社に集まった。

紫「……らしくなかったわね」

紫は苦笑の笑みを浮かべ、さてみんなに呼びかけようとしたその時

魅魔「おお、集まってるね〜」

突然、神社の屋根の裏に魅魔の姿が現れる。ここに来るまで誰一人として気付けずに。

魔理沙「み、魅魔様!？」

魅魔「お〜、久しぶりだね、魔理沙」

一体何年ぶりに師匠の姿を目にしたか。ただ魔理沙は、今の状況からして、再び会えた事の驚きと不安の文字が、半分ずつ心の中に浮かんだ。

東方旧今伝 第3話（前書き）

今回は少しシリアスが入ります。

東方旧今伝 第3話

チルノ「誰よあんた。そこから降りて来なさい！」

急に神社の屋根に座っていて、その上から目線的な態度が気に入らなかつたのか、チルノは手の平サイズの氷の弾を、魅魔に向かって投げつける。

魅魔「ん〜、しがない悪霊だよ、小さな氷精」

するとチルノの氷弾は、なんと魅魔の体をすり抜けて、そのまま力サツと、裏の草むらに落ちる。

チルノ「あれ、弾が当たらない？」

魅魔「悪いねえ〜、今私はここに『存在』していないんだよ」

チルノ「えっ、だってそこにいるじゃない」

魅魔「あっはっは、妖精にはちょっと難しかったかね〜」

チルノが何度も首を傾げる光景に、魅魔は笑い声を上げる。

アリス「…多分、立体映像ってやつかしらね」

魅魔「さすがアリス、察しがいいな」

これが映像に全く見えない。それ程あちらに技術がある事を指し示す。

幽香「夢美の奴ね。もしかして、『みんな』いるのかしら？」

魅魔「もちろん、『みんな』揃っているぞ、幽香」

この言葉のやり取りを意味を理解出来たのは、魔理沙、アリス、幽香の3人だけだった。

魔理沙「まさか…、『禁忌』を犯したのですか」

魔法、呪術、霊術などの類でも、「死した者を現世に蘇らせる」事は禁術、決してしてはいけない事。

頭で理解しても、この事実を受け止め切れない魔理沙は、まさに顔面蒼白と言える状態だ。

魅魔「まつ、難しい事云々はさておき、私、いや私達は」

紡ぐ言葉に、少し間を置く。そして、高々に宣言する。

魅魔「この幻想郷を、支配する」

この一言に、皆が驚き、焦り、困惑、怒りなど様々な反応を見せる。

レミリア「幻想郷を支配ですって」

妹紅「なんだてめえ、幻想郷の王にでもなるのかよ」

二人の問い掛けにも、冷静に言葉を投げ掛ける。

魅魔「蓬莱人に吸血鬼、それは違うぞ。ただ今の幻想郷の姿は間違えている。人と妖は相交わえぬ存在」

慧音「それは過去の話し、今は違う！」

魅魔「ワーハクタク、確かに今の幻想郷は平和だ。表だけを見ればな。では何故、本来地底の妖怪ではない『鬼』が、今そこに住んでいる」

勇儀・萃香「…ッ!？」

この質問には、沈黙を生んだ。

鬼、本来は妖怪の山を統べいた妖怪。幻想郷がなり始め、妖怪が人と妖怪と徐々に分かち合えた、ほんの僅かな時だけ。

人間は万人が鬼を良しとしていない者が少なくない。正直過ぎる鬼の性格を利用し、次々と殺していったのだ。

「化者が！」

「さらったやつを償え！」

集団リンチ、暗殺、毒殺、人間は外道とも言える行為を繰り返した。

おかげで、鬼は今や数えるくらいにまで減少し、妖怪には力を恐れられ、人間には存在を否定され、鬼は地底へと移り住まされたのだ。

魅魔「さらに、河童の技術、天狗の情報、外からの来訪者。幻想郷に確実に『科学』という見えない力が、やがて我々妖怪を滅ぼす」

人は妖というものに恐れている。しかし、それは『力』が無いだけだから取る態度。

今や外では子供や年寄りまで使える殺しの道具があるという。

そんな『科学』が幻想にまで流れて人の力となりし時、幻想を滅ぼす毒となるだろう。

魅魔「人には信、仲、正、はない。疑、欲、負を持つ滑稽な者ばかりだ。幻想郷は、昔の頃に戻るべきだ」

早苗「でも、人間だって自分を抑えたり、分かち合えたりします！」

魅魔「では守矢の巫女よ、何故こちらに来た。お前は本来外の人間なはずだが」

早苗「そ、それは…」

次々と皆の心にピンポイントで質問をする魅魔。その時、

萃香「出来るぞ」

博霊神社に漂う負の空気の中、伊吹萃香は魅魔に異を唱える。

萃香「人間はな、確かに力も弱いし、ずる賢い。欲に塗れた愚か者

も私は見てきた」

勇儀「妖怪も私達鬼を恐れ、影からよく声が聞こえたさ」

勇儀も、萃香に続いて言葉を出す。

萃香「それでも、小さく、一歩でも、理想って奴に近づけばいい。今この瞬間まで、人間と妖は相交える事が出来たのは、人間にも信じ合っつて気持ちだが、妖怪と繋がったからだ」

勇儀「それに、昔のあんな殺伐とした空気は、もうゴメンだよ」

二人の意見に、魅魔はハア〜と溜め息を付く。

魅魔「なら、その意思がどれ程のものか、幻想郷らしく、戦いで決着を付けようじゃないか」

そう言つと、魅魔の姿が不快な電子音と共に歪んでゆく。

魅魔「余談だが、死神と閻魔は無事だぞ。では、また会おう」

それが最後の言葉となったようで、魅魔の姿が屋根からプツンと消えた。

鈴仙「あはは……とんでもない事になっちゃいましたね」

輝夜「言いたい事だけ言っつてさようならですか」

パチュリー「まるで宣戦布告の挨拶って感じがしたわね」

お空「売られた喧嘩なら買ってやる!」

お燐「お空、ちょっとうるさいよ…」

緊迫した空気が一気にほぐれ、各自がざわざわと雑談をするのであった。

その時

幻月「それじゃ、その喧嘩とやらを買ってやるうかしら?」

空から声が聞こえた。幼い、しかし感じる妖気は別格。

白き翼を広げる姿は天使か、はたまた悪魔か。ただ心に真っ先に浮かぶのは、『危険』

魔理沙「ア、アリス!」

アリス「分かってるわよ!」

まるでこの後何が起こるか分かったかのように、二人はスペルカードを手に持つ。

幻月「映像だけじゃなくて、実物も挨拶しなきゃね。挨拶にでもど
うぞ」

紅闇「キリングカーニバル」

幻月の回りに、一…十…百を超える赤や黒の弾が生成され、それ
らが神社を埋め尽くすように降り注ぐ。

魔理沙「防げよ、アリス！」

アリス「あんたこそね！」

恋符「マスタースパーク」

咒詛「蓬莱人形」

二つの巨大な光は、幻月の弾幕を掻き消すが、幾つか消し切れない
のがあった。

幽香「ハア、二人ともちゃんと防いでよ」

恋符「マスタースパーク」

傘を上空に翳し、先端から光の奔流が残りの弾を掻き消したのだ。

幻月「さっすが3人ね」

魔理沙「随分な…」

アリス「…挨拶ね」

幽香「幻月、久しぶりね」

この4人はあの少女を知っているようだった。

妖夢「あの3人で互角なんて…」

一輪「…何なのよあいつ」

ナズーリン「我々は完全に蚊帳の外だな」

すると、幻月が神社に居る妖怪達を見回す。

幻月「ふうん、思ったよりは齒ごたえある奴がいるのね」

すると、遠くから文とはたての姿が見えた。背中には四季映姫と小町の姿もある。

幻月「お疲れ様」

文「……」

いくら重荷があるからと言って、ああも簡単に抜かれるなんてと、文は少し悔しそうな顔をする。

幻月「挨拶は終わったし、帰るわ。次会ったらお相手よろしくね。簡単にやられないでよ」

そう言い残すと、幻月は裁判所へと物凄い速さで飛んでいった。

魔理沙「……とりあえず、あいつらについては神社で話す。みんな中に入ってくれ。いいだろ、霊夢？」

霊夢「……状況が状況な訳だし、別にいいわよ」

霊夢の返事が出ると、皆はそろそろと神社の大広間へと移動を始めた。

東方旧今伝 第3話（後書き）

中々上手く操作が出来ない？

東方旧今伝 第4話

〔博霊神社の大広間〕

先程の旧妖怪の奇襲が終わり、事の詳細を話すべく、異変に関わった幻想郷で妖怪のほとんどが集まっている。

魔理沙「あゝ、私もそれ程飲み込めてはいないが、担当直入に言う
と」

仕切ったりするのは私は苦手なんだがな〜っと、軽い溜め息をつく。

魔理沙「旧妖怪が復活した」

旧妖怪、とみんなが聞いてもほとんど全員がわからないという空気
や仕草を見せる。

アリス「そんなアバウトな説明じゃ伝わらないわよ」

魔理沙「んじゃアリスが仕切ってくれよ」

幽香「面倒事が嫌いなのは昔と変わらず」

魔理沙「お前もだろ」

何ともグダグダなやり取りに、アリスは肩を落とした。

アリス「まあいいけど。まず、幻想郷ではあまり行かないであろう
『魔界』や『地獄』があるわね」

何か余程の用事がない限り訪れたくはない二つの場所。何故そんな所を例に上げて説明するのかと、これまた皆は首を傾げる。

アリス「先代の博霊、まだ弾幕ごっこが出来てない頃、あなた達は特に異変とかに興味が無かった頃、実は5つの少し大きな異変があったのよ」

阿求「それなら少し聞いた事があります」

靈異伝、封魔録、夢時空、幻想郷、怪綺談、この5つの事が稗田の先代の書物に書かれていました。

阿求「ただこれらの情報がほとんど得られなかったのか、この異変の名前以外は何も書かれていませんでした」

幽香「書こうにも書けなかったと思うわ。弾幕ごっこが無かった頃は、単なる殺し合いが主流だったもの」

幽香の言葉に驚く者がほとんどだった。昔は解決と言えば、まるで実力が全てだと物語っている。

アリス「阿求の言った通り、昔にも異変はあった。でもそれらは、先代の博霊が迅速に終わらせた」

霊夢「ふ〜ん、何で魔理沙はこの事教えてくれなかったの？」

魔理沙「私はあんまし過去は蒸し返したくない、それに昔の事は正直忘れないぜ…」

そう、先代の「博霊靈夢」は、この5つの異変に対して、

『たったの一度も被弾せず』に、坦々と妖怪を退治してきた。そんな事を霊夢に話したら絶対むきになるなど、魔理沙は難しい顔をする。

アリス「とにかく結論から言えば、その異変で退治された妖怪が復活したって事。後、映姫に小町。旧妖怪はどうやって現れたの？」

永林の応急処置が終わった小町と映姫。

二人はアリスの問いに答える。

小町「ああ、あたいが裁判所に魂達を送って、四季様に報告しようと考えた途中、三途の川の上空に沢山の妖気を感じたんだよ」

映姫「私もその事に気付いて外に出たんですが、多分、転移魔法でも使ったと思われます」

上空に描かれてた巨大な陣から、今まで見た事のない妖怪やら人間が現れた時は、冷や汗が止まりませんでした。

映姫「その中に地獄の管理をしているはずの魅魔の姿があり、裁判所を渡してくれと提案してきました」

小町「状況が全く読めなかったが、あたい達はそれを断りました。そしたら、一人二人とあたい達に向けてスペルを使い始めたんです」

何回も相手の猛攻が続き、さすがにヤバいという感じもしましたよ。ただ、逃げてる他の裁判員や死神達には危害を加えなかった事には

少し驚きましたが。

はたて「何でまたそんなになるまで戦ったのよ？」

いくら実力があるからと言って、倍以上ある戦力に、勝負に打って掛かるなんて。その問いに小町は苦笑いを浮かべる。

小町「そりゃ裁判所の中にいる奴らを逃がす為の時間稼ぎでもあり」

映姫「紫がこの事に気付いて何か手を打ってくれると思ってましたが」

その言葉に紫は申し訳なく思い、頭を軽く下げる。

紫「ごめんなさい。どういう訳か、今はスキマが使えないみたいなの」

魔理沙「でも文とはたてが間に合ってくれたからよかったよ」

やっぱり幻想郷最速の種族でもある烏天狗は伊達じゃないってやつだな。

文「…本当ならあの小さな妖怪にやられると思ってましたが」

はたて「そいつ、私達を見てからそのまま博霊神社に凄い速さで向かったのよ」

アリス「あいつは弱い奴や何かしらハンデがある相手には興味無いのよ」

天子「はっ、大した自信家ね。あたしが直々に相手をしてあげようかしら」

負けず嫌いにな天子はぴん、と人差し指をアリスに向ける。いや、あたしに刺されても…。

魔理沙「まあ落ちつけ天子。まずは今後の事を決めようぜ」

紫「そうね、とりあえず…」

と紫がこの状況を打破する対策を考えようとした直後。

ルイズ「こんにちは」

大広間の真ん中に、白い服とバツクを持った女性が急に現れる。

アリス「ルイズ!？」

ルイズ「久しぶりね、アリス。随分と大きくなったわね」

霊夢「…魔理沙、こいつ」

魔理沙「待て待て霊夢。とりあえず針と札を仕舞え。後、みんなも殺気を出すな」

魔理沙がそう言つと、殺気が消えたと同時に、ルイズは魔理沙の所に歩みを進める。

ルイズ「ありがとう、魔理沙。ふふ、あなたも変わったわね、アリス以上に」

魔理沙「その話しは止める。で、何か用でもあるんじゃないのか」

ルイズ「あら、冷たいわね。うーん、魅魔から何だけど」

ルイズはそのニコニコとした笑顔から、とんでもない事を口に出す。

ルイズ「1000日。1000日経ったら、『トワイライト』撃つって」

この謎めいた言葉に、魔理沙、アリス、幽香は驚きの反応を示す。

魔理沙「あ、あれを撃つのかよ!？」

幽香「へえ、あれ撃つなんてね」

アリス「制限時間付きになっちゃったわね」

咲夜「ちょっと、そっちばかりで話しを進めないでくれるかしら」

あまりにもアウエー感が出てきたのか、咲夜は異を唱える。

魔理沙「あ、ああ、悪い。ルイズの言ってたトワイライトってのは」

幻想郷が滅ぼせる、最強の魔属性攻撃だと、魔理沙は少し動揺した

話し方で答える。

さとり「……幻想郷が滅ぶ、ですって」

今までそれ程リアクションを見せなかった者も、この言葉には無視出来ないと感じる。

ルイズ「それじゃ、伝える事は伝えたから、私は帰るわ。次は敵として会いましょう」

移符「トリップステップ」

ルイズがその場でジャンプをすると、その場から彼女の姿が消えた。

アリス「あゝ、何でも面倒な事が続くのよ」

事あるとマイナスに進む状況に、皆の気持ちも沈んでいった。

東方旧今伝 第4話（後書き）

毎日更新……、まだ大丈夫かな……

東方旧今伝 第5話

ルイズ「ただいま」

サラ「あつ、お帰り」

裁判所は既に旧妖怪の拠点として機能しており、各自広間で寛いでいる。

ルイズ「あつちの人妖の反応が面白かったわよ」

エリー「さすがに、トワイライトに初見でビビらない奴なんてないわよ」

過去に魔界で一度先代博霊に魅魔が100%ではないが撃つた事はある。

しかし、玄爺と靈夢の合体技『真・博霊封魔』に防がれてしまった。

魅魔「まあ、正直これは半分冗談なんだがな」

ユキ「あれ、それじゃただの脅しってやつなの？」

魅魔「いや、別に使ってもいいんだが、後が面倒なだけどね」

幻想郷の再生は何かと時間掛かるからね。それなら、力のある奴らを無力にした方が安全で、何より面白い。

サリエル「それでも結構大変かもしれませんよ。あちらには幽香や白蓮がいますし」

コンガラ「…白蓮、懐かしい響きだな」

二人は過去に白蓮を知っている。何故なら、法界に閉じ込められる前、魔界で多少相手をした事があるからである。

今の幻想郷の妖怪も、少なからず関わりがある者もいた。

マイ「それで、一応100日って期限なんだから、さっさと仕掛けちゃうのかしら?」

魅魔「まあそう焦らなくてもいい。逆に100日もあると思えばいい」

夢美「なら、ちょっといいかな」

夢美が即座に意見を唱える。

夢美「まずは相手の力の分析をしたい。とりあえず『小物』を与えてやらないか?」

理香子「まあ戦力の確認に関しては私も同意だよ」

幻月「私みたくすれば面白いんだけど」

神綺「幻月、実は熟してからの方が美味しいわよ」

幻月「それもそうね」

魅魔「最初はそれぐらいが丁度いいな。夢美の方法でいくが、皆もそれでいいか?」

魅魔の言葉に、全員が同意の意を示す。

魅魔「それじゃ、シンギョク、里香、夢月、よろしく頼む」

シンギョク「わかった。では…」

シンギョクが女性の姿へと変わる。

シンギョク（女）「私の出番ってわけね」

里香「こんなガラクタに期待はしないでくださいね」

夢月「いきます」

三人が同時にスペルを唱える。

式符「ゴーストサモン」

機符「イビルポット」

兵符「セットアップポーン」

魔理沙「とりあえず、今言った場所と組み合わせでいてくれ。くれくれも、単独行動はしないでくれ」

場所と人については、

博霊神社「博麗霊夢、霧雨魔理沙、大妖精、チルノ、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア、比那名居天子、永江衣玖、レティ・ホワイトロック、伊吹萃香、朱鷺子、森近霖之介」

人里「稗田阿求、上白沢慧音、藤原妹紅、ルーミア、ミスティア・ローレライ、リゲル・ナイトバグ、風見幽香、メディスン・メランコリー、ルナサ・プリズムリバー、メルラン・プリズムリバー、リカ・プリズムリバー」

紅魔館「紅美鈴、小悪魔、パチュリー・ノーレッジ、十六夜咲夜、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット、キスメ、黒谷ヤマメ、水橋パルスィ、星熊勇儀」

永遠亭「因幡てゐ、鈴仙・優曇華院・イナバ、八意永林、蓬萊山輝夜、小野塚小町、四季映姫・ヤマザナドゥ」

守矢神社「秋静葉、秋穰子、鍵山雛、河城にとり、犬走椋、射命丸文、東風谷早苗、八坂神奈子、洩矢諏訪子、姫海棠はたて」

命蓮寺「ナスリーン、多々良小傘、雲居一輪、村沙水蜜、寅丸星、聖白蓮、古明地さとり、火焰猫燐、霊烏路空、古明地こいし」

マヨヒガ「八雲紫、八雲藍、橙、西行寺幽々子、魂魄妖夢、アリス・マーガトロイド」

この7つの場所に陣を構える。

天子「一気に攻めて拠点の制圧でもよかったんじゃないの」

魔理沙「相手のホームに正面突破に出た所でやられるのがオチだ。それにもし、全員揃っているなら」

岡崎夢美。こいつの頭脳はどんな人間や妖怪よりも一枚も二枚も上をいく。

ストリートでいった所で、相手の作に溺れるだけだ。

さらに自身も実力があるから嫌な相手だと、頭痛が収まらないように頭に手を置く。

魔理沙「そして、トワイライトが発射される10日前には、裁判所へ総攻撃を仕掛け、師匠を捕縛する。それまでは、相手の攻撃等に専念してくれ」

レミリア「ちなみに魔理沙。来た相手を、別に倒してしまってもいいんでしょ？」

魔理沙「ああ、もし倒せたら博霊神社まで運んできてくれ。後、チルノ、大妖精、サニー、ルナ、スター」

大妖精「な、何ですか、魔理沙さん？」

自分達妖精が呼ばれる事に予想外だったのか、チルノ以外は何か焦ってるような仕草を見せる。

魔理沙「お前ら5人は明日から、わたしとレティで霧の湖で特訓だ。

レティ、悪いが付き合ってくれるか？」

急に頼み事を申し付けられたレティは、少し驚きながらも、直ぐにやんわりとした表情で言葉を返す。

レティ「私なんかで良ければ、別に構わないわよ」

魔理沙「サンキューな。よし、決まりだ。お前らピシバシ鍛えてやるからな」

4人「ええ……」

チルノ「特訓って最強に近付くんですよ。ならやっつてあげるわよ！」

いい度胸だと、魔理沙はチルノのその元気っぷりに感心する。
なんせ相手が相手、一人でも強い戦力が欲しい所だ。

こいし「……あ、何か力の集まりが3つくらい感じる！」

不意にこいしが、妖気の気配取る。今まで感じた事が無いものに、思わず大声を上げてしまう。

紫「妖怪の山、人里、永遠亭に近いわね」

魔理沙「チツ、もう手を打ったのかよ」

さすがに待った無しでくるかと、魔理沙は軽く舌打ちをする。

華仙「でも、一つ一つの力は小さいですね。数は多いようだけど」

アリス「多分、戦力や地形確認って所だと思っわ」

夢美や理香子辺りが考えそうねと、アリスは面倒だと溜め息を表わにせる。

魔理香「それじゃ、守矢班、人里班、永夜班は対処をよろしく頼む。残りは、各自指定された所に行ってくれ」

魔理沙の言葉を受け取り、それぞれが大広間から移動を開始する。

諏訪子「なんかとんでもない事になっちゃったね」

早苗「す、諏訪子様、そんな呑気な態度で…」

普段なら気持ちがいい秋の風だが、今は状況のせいか、軽く寒気すら感じてしまいそうだ。

神奈子「大丈夫だ、早苗。こんな異変はさっさと終わらせるよ」

雛「それに、負の気持ちばかり背負っては、勝てる戦いも負けてしまいますよ」

穰子「それなら、相手をぶっ潰してやるって気持ちの方が葛が着くわよ!」

静葉「穰子、テンション高いわね…」

早苗「ふふっ…そうですね」

こんなに仲間がいるのに弱気になるなんて情けないと、早苗は心の中で反省する。

椀「……あれは」

椀の目が何かを捉えたようだ。

文「椀、どんな敵ですか？」

椀「何と言いますか……、鉄の塊が浮いています」

にとり「もしや機械系、一体くらいサンプルで捕まえていじくり回したいね」

こんな状況でも職人魂は見逃さない、さすが幻想郷一のエンジンニア。

はやて「……え、なによあれ」

私達の瞳に映る先に、小さな黒い球体みたいなものがふわふわと浮いている。

キラキラとした機械の部品や光沢から、機械系の敵だと認識出来る。

諏訪子「数は多いけど、私達でちゃちゃっとやっちゃおう」

鈴仙「小町さん、映姫さん、あなた達はまだケガを完治していないので、あまり無理をなさらないで下さい」

映姫「……すみません、お心遣い感謝します」

てゐ「私達の所の近くにいるなんて、運がないウサ」

私の幸運皆無ですかと、てゐは面倒そうな顔をする。

輝夜「さて、敵さんが見えてきたわね」

迷いの竹林の外側に、様々な色の火の玉が見える。

赤、青、緑など色鮮やかな感じもしなくはないが、今は不気味さを醸し出している。

小町「おいおい、ありゃ魔界にいる強い靈魂達じゃないか」

普段なら絶対に地上では見ないであろうと、小町は軽く驚きを表に

する。

永林「考えられるのは、誰かが操ってる。でなければ、こんな所にいるはずないものね」

てゐ「あつ、なんか輝き始めたウサ」

「私達を敵だと認識した合図みたいなもんだよ」

阿求「慧音さん、ありがとうございます」

慧音「これぐらいはお安い御用です、阿求殿」

人里の南門の入り口付近に、慧音は背中に背負っていた阿求を地面に降ろす。

妹紅「…あいつらから、嫌な妖気が感じられるな」

メディスン「なんか凄い格好だね」

門から少し離れた所から、ガチャ、ガチャと、綺麗に揃った足取り

をする兵隊が、こちらに向かって来る。それぞれ、剣と盾を持っている。

幽香「ポーン……夢月のね」

華仙「あの妙な格好をした奴らを知っているのなら、強さは見た目だけでですか？」

幽香「ええ、妖力を感じれば分かると思うけど、少し頭のいい下級妖怪程度よ」

妹紅「なら、さっさと片付けようか」

太陽に勢い良く照らされる正午に、各自雑魚の対処を開始する。

東方旧今伝 第5話（後書き）

旧作雑魚キャラの確認

イビルポット（強さは原作1面の雑魚程度）

目から小さい弾を発射する、見た目は機械だが、妖力で動いている。

魔界の靈魂（強さは、3面の雑魚程度）

冥界にいる幽霊より多少強いが、知能がないので回避は苦手。

シンギョクの有人操作は、ゾンビフェアリー（5面雑魚程度）より強くなる。

ポーン（強さは2面雑魚程度、リーダーは3面雑魚程度）

右手に剣、左手には盾を持っている、昔の西洋の兵隊みたいな格好をしている。

知能はそこそこあり、集団戦では少し厄介。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1940ba/>

東方旧今伝

2012年1月9日22時50分発行